



奏祭復元事業2016「三番組のまとい」キラキラパレード出場

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.38

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1 「奏祭復元事業」をふりかえって	P.2~3
特集2 第13回むかしのくらし展「体と道具」	P.4
歴史さんぽ 万代島	P.5
おすすめの一冊 「花押を読む」	P.5
特集3 地域の歴史文化創造・振興と資料公開	P.6
館長日記 仙台市郡山遺跡と山中樫	P.7
収蔵資料紹介 森山一虎「日満航路 一月山丸」	P.7
博物館 あちらこちら 旧信濃川河道	P.8



帆樫成林「はんしゅうせいりん」第38号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社ウエッザップ

【たいけんのひろばプログラム】楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
10月2日 14:00~15:30	みなとびあのどんぐりでクッキーをつくらう	みなとびあの敷地にあるマテバシイの実を使って、どんぐりクッキーを作ります。縄文人のように石の道具を使ってみましょう。	要申込み・小学生以上 先着15人・100円
10月8日・9日 14:00~15:30	古代のガラス玉づくり	古代人の貴重なアクセサリだったガラス玉を古代の方法で作ります。ガスバーナーを使った現代のトンぼ玉も作ります。	要申込み・小学生以上 先着10人(各日)・200円
10月16日 14:00~15:30	こども歴史クラブ⑥ 拓本を取ってみよう	土器や古銭などを使って、形を写しとり、記録する拓本の技術を体験してみます。	こども歴史クラブの部員が対象です
10月22日 10:00~12:00	みなとびあワラ部	ワラゾウリの自主練習をします。初心者の方もどうぞ。	ワラ部部員が対象です
10月23日 13:00~16:00	どんぐりで遊ぼう	みなとびあのマテバシイをはじめ、いろんなどんぐりを使って、おもちゃやアクセサリを作って、飾って、遊びます。	申込み不要・定員なし・無料
10月29日・30日 14:00~15:00	企画展関連 むかしの道具で遊ぼう	てんびんぼうなどを使って遊ぶ体験をします。	申込み不要・小学生以上 先着20人(各日)・無料
10月30日 10:30~12:00	みなとびあで親子自然体験	みなとびあの敷地で自然に触れながら親子で楽しく遊びます。	要申込み10/27まで・2歳以上の未就学児と保護者 先着15組・無料
11月12日・19日 14:00~16:00	大人の体験講座 ワラゾウリづくり①・②	むかしながらのワラゾウリ作りを、2週にわたって行います。	要申込み10/26まで・全2回参加できる16歳以上10人・応募多数抽選・無料
11月13日 11:00~12:00	企画展関連 きねでもちをつこう	きねどうすを使ったもちつきを体験します。	申込み不要・もちがなくなり次第終了・無料
11月19日 ①10:00~12:00 ②14:00~16:00	大人の体験講座 サケの塩引きづくり 於：食育花育センター	食育花育センターにて、鮭をさばいて塩をすり込むまでを行います。	要申込み11/3まで・16歳以上各回16人(応募多数の場合抽選)・4000円

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

第13回むかしのくらし展「体と道具」

「かつく」「背負う」「打つ」など道具の使い方に着目して、人々の知恵や工夫を発見するとともに、人と道具とのかかわり方からくらしの変化を考えます。

会期 2016年9月10日(土)~11月27日(日)

観覧料 無料 *常設展の観覧は有料です 休館日 毎週月曜日(9/19/10/10は開館)・11/24(木)

主催 新潟市歴史博物館

関連事業
■体験プログラム「体と道具のはたらきを体験 ①むかしの道具で遊ぼう」
日時:10月29日(土)・30日(日)14:00~15:00 会場:1階たいけんのひろば 定員:20人(各日・先着)
参加費:無料 申込み:事前申込み不要、直接会場へ。
内容:てんびんぼうなどを使って遊ぶ体験をします。汚れてもよい服でご参加ください。
■体験プログラム「体と道具のはたらきを体験 ②きねでもちをつこう」
日時:11月13日(日)11:00~12:00(もちがなくなり次第終了) 会場:1階エントランスホール
参加費:無料 申込み:事前申込み不要、直接会場へ。

次回企画展

「近世黎明—堀直寄と新潟—」展

2016年は堀直寄が新潟町を領地とした年から400年目に当たります。現在につながる町や村が確立した時代である江戸初期の新潟について、堀直寄の生涯を軸に考えます。

【会期】2016年12月10日(土)~2017年1月29日(日) 会期中展示替えあり

【休館日】毎週月曜日(1/9は開館)・12/27(火)~1/3(火)・1/10(火)
【観覧料】大人600円[480円]/大学生・高校生400円[320円]/中学生・小学生200円[160円]

*中学生・小学生は、土・日・祝日の観覧料が無料です。
*[]は団体料金(20人以上)
*企画展観覧料で常設展示もご覧いただけます。

【主催】新潟市歴史博物館

お知らせ

旧新潟税関庁舎展示資料の公開

現在、新潟税関庁舎は改修工事のため、内部の見学ができなくなっています。それに伴い、六灯ランプ(市指定文化財)など旧税関内に展示されていた資料は、本館エントランスホールに場所を移して公開しています。

編集後記

38号では、第13回むかしのくらし展「体と道具」についてご紹介しました。展示室では、体の動きと道具の動きのかかわりを、まさに体感していただくコーナーが複数設けてあります。ぜひ、ご家族で楽しみながら、昔の生活について考える機会としていただければ幸いです。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。(中村)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel：025-225-6111 Fax：025-225-6130
E-mail：museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/4)
【開館時間】(4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



博物館 あちらこちら

旧信濃川河道

旧新潟税関庁舎の前を流れる水路は、信濃川もとの川岸を示しています。昭和初期の川岸埋め立てにより、信濃川の川幅は半分以下に縮小されました。だいぶ遠くを流れる現在の信濃川を眺めながら、ぜひかつての姿を想像してみてください。また、今年も「みなと・しもまち・川祭り」(新潟北部開発協議会主催)が開催され、ここで灯籠流しが行われるなど、さまざまに活用されています。



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

NST 日和山五合目 北陸ガス NSGグループ Water Shuttle HENSA 本間組
新潟造船 田中屋本店 第四銀行 堀川 新潟「いっちゃん」

「湊祭復元事業」をふりかえって

渡邊 久美子

当館を核に、コミュニティ協議会、市民団体、新潟市で構成する「みなと新潟実行委員会」は、前年度、文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」を受け、三番組の纏の組立て・展示公開を中心とした「湊祭復元事業」を実施しました。

湊祭とは、江戸時代にさかのぼる新潟まつりのルーツのひとつで、その歴史は現在の住吉行列に受け継がれています。戦前まで、町の祭り組から様々な出し物が出される盛大な祭りが行われていました。

「湊祭復元事業」は、平成三十一（二〇一九）年に迎える新潟開港二五〇周年を前に、湊町文化を掘り起こし、地域の歴史文化に対する市民の関心を高め、今後のまちづくりに寄与することを目的にした事業です。

今年度は、より視覚的に湊祭を再現するため、三番組の纏の曳き回しをメインイベントとする「湊祭復元事業二〇一六」を前年度と同じ補助金を受託して実施しました。「湊祭復元事業二〇一六」は、①三番組纏の部材の修理と飾り幕の復元制作、②市民との共同による纏の曳き回し、③祭祀研究の専門家による講演会（二回開催）、④事業

のパネル展の四つの事業に分かれていました。同事業の実施期間は、筆者が担当した企画展「新潟みなとまつり展」の会期にもあたり、双方の事業を同時に行うことで、展覧会・イベントをより盛り上げようというねらいがありました。本稿では、主に曳き回しの取り組みについて紹介するとともに、筆者の所感を述べていきます。

二〇一五年「湊祭復元事業」

「纏」とは、湊祭の祭り行列に曳き出されたいわゆる「山車」ですが、湊祭の昼祭に参加する一番から八番の組がそれぞれ組の先頭に出すシンボリックなものでした。

当館所蔵の三番組の纏は、前身の新潟市郷土資料館が本町通十番町町内会より、平成十（一九九八）年に寄贈を受けたものです。三番組は本町通十番町、上大川前通十番町からなる組ですが、戦後は本町通十番町が纏を管理していました。詳細については、「博物館ニュース」三十五号及び「湊祭復元事業報告書」に掲載していますので、そちらをご覧ください。

纏は、樹種不明ですが木材でつくられ、表の見える部分には漆塗りが施さ

れています。寄贈以来、館の収蔵施設に保管してきましたが、昨年度、復元事業を契機に組み立て、館内エントランスにて約一ヶ月間、展示紹介しました。組立てには、旧蔵者の本町通十番町町内会の指導を得て、手順と飾り付けを学びました。

三番組の聞き書き調査

組立てのノウハウを得たのち、実際の曳き回しの様子について、昨年度、旧蔵者から聞き書き調査を行いました。

戦後以降、新潟まつりで三番組の纏を曳き出したのは、本町通十番町町内会です。戦後の様子を知るのは、元町内会長（大正十五年生まれ）です。元町内会長によると、纏は祭りが中止されていた戦時中、本町通十番町の蔵の下屋に置いてあり、戦後確認した際は大分痛んでいたそうです。現況でも木材の欠けやひび割れ、漆の剥離などの破損が、殆どの部材に見られます。本町通十番町が管理するようになってから、漆の剥離を町内の仏壇店に補修してもらい、部分的な修理をし、町内の蔵で保管してきました。

本町通十番町が、新潟まつりに纏を出したのは昭和二十年後半頃のこと

を検討し直し、当日に備えました。柱の先には、本来剣が取り付けられるもので、さらに高さがありました。

纏の曳き手は、市報、チラシなどで公募し、スタッフを含めて総勢四十名にのぼりました。

本番当日は、本町通十番町町内に場所を借り早朝より組み立て、待機場所の古町通七番町を目指して出発しました。

スタート地点の新潟中郵便局から礎町までの約五〇〇メートルの距離を「わっしょい」のかけ声とともに練り歩きました。この日、デイズニーシーのパレードが登場することもあって、沿道には多くの家族連れの姿が見られました。初めて目にする三番組の纏を興味深そうに見つめる観客も多かったように感じました。

だと言います。この頃、子どもが一軒に数人はいいて、男子には樽みこし、女子には民謡踊りをさせたそうです。当時二十代だった元町内会長は年長者の指示のもとお祭りの準備に走ったと、賑やかだった様子を懐かしそうに語っていました。纏の組立てには、十〜十五人で取りかかり、夜は用心のため、町内の人がお酒を片手に番をしたそうです。纏を曳いて、学校町や榎谷小路を歩いた年もあったそうですが、住吉の神輿を御祭堀（五菜堀）で迎え、広小路までを行列することが多かったとのこと。行列は、先頭を先頭に太鼓、纏と続き、纏は紅白綱を取り付けて子どもたちに曳かせ、大人は十数人が梶棒と纏の後ろに取り付けました。進行と停止は拍子木を打って知らせ、歩いたそうです。

纏の修理・幕の復元制作

「湊祭復元事業二〇一六」では、纏の全体の重量を支える車軸の補強修理、三番組の纏の土台周りに取り付け幕の復元制作を実施しました。車軸は、材に大きなひび割れが入っていたため、曳き回しに耐えうるよう補強することになりました。そこで相談に乗って頂いたのが、旧小澤家住宅の活動で協力を

今後の課題

八月六日の新潟まつりでは、戦後以降旧町組として住吉行列を担ってきた八番組が神輿の先導を務め、キラキラパレードでは当館の三番組の纏、午後の住吉行列には、約六十年ぶりという一番組の纏が加わり、いつもとは少し異なった趣向が見られたかと思えます。

今回、企画展と合わせて開催した「湊祭復元事業二〇一六」は、短期間、限られた人員で進めたためでもあります。祭りの維持、継続の大変さを実感する機会となりました。

現在、新潟まつりの祭り組は学校区ごとに構成されており、八番組は白山小・白新中学校区、戦後結成された百壺番組は新潟小・寄居中学校区で担っています。一番組は昨年統廃合により日和山小・新潟柳都中学校区が誕生し、今後の方向性を検討中だと聞き及んでいます。三番組も校区でいうと二番組と重なりませんが、町内に子どもは殆どいないという事です。

人口減少、少子高齢化が叫ばれて久しい地域において、文化を育むため歴史博物館がどのように関わっていくべきかは大きな課題ですが、今後も調査を進め、その成果を市民の取り組みに還元できるように、活動を行っていきたいです。

（わたなべ くみこ 学芸員）



幕の復元製作 於寺嶋旗幕染工場

得ている林仏壇店です。部材を確認後、修理方法について検討してもらいました。実際に作業に当たったのはツチャ製作所です。車輪の取り付け部にはナイロンの板を入れ、取り付け部の材が削られないようにし、軸端には割れ止めの金具を取り付けています。軸の割れは金具で補強しました。

纏の幕は、青地に白い波模様柄ですが、汚損が激しいため、明治五（一八七二）年創業の寺嶋旗幕染工場に復元制作を依頼しました。

元の柄を写し取り、「筒の置き」という技法を用いながら手作業で模様を再現しています。

新潟まつりキラキラパレードの出場

三番組の纏は、本来住吉の神輿巡行



パレード前の組立て 於 本町通10番町

は、広く市民の参加を募り、博物館資料を活用するという観点から、様々な団体が出場できる新潟まつりキラキラパレードにエントリーする方向で調整を進めました。

祭りの様子は戦後の様子がかろうじて元町内会長から聞き取れる状態であることから、前述した戦後の事例を参考に、曳き回しを実施することになりました。

八月六日のパレード本番を前に、七月二十七日、当館ボランティアスタッフ、博物館実習生の協力のもと、纏を組み立て、曳き回しのリハーサルを行いました。修理した車軸、車輪部分もうまく駆動し、問題なく運行できることを確認しましたが、纏の最大の高さが約四・六メートルあり、電線に接触する



キラキラパレード出場

「体と道具」

今回のむかしのくらし展は「体と道具」をテーマに、「さまざまな体のはたらし」、「体のはたらしをたすける道具」、「体の技と道具のはたらし」、「手の技と衣食住の道具」、「道具を作る・修理する・使いつくす」という五つのコーナーで展示を構成しています。具体的には、くらしに使われた道具の形と、それを使う体の動きに着目して、運搬具をはじめ生業や衣食住のくらしの道具と、道具を使っている昭和三〇年代の写真を展示しています。体の動きを、展示という手法で扱うのは難しいのですが、本展では体の部位と動きを、背負う、かつぐ、打つなどと単純化してまとめ、それに対応する道具を展示しました。

たとえば、鍬や杵のように打つ(搗く)道具は、遠心力を生み出す柄があり、柄の先には重力を活かす重い頭があり、勢いを増します。道具を並べてみるとこうした大まかな共通点が明快になり、道具によって効果的にはたらく体の部位も見えてきます。くらしに使われてきた民具が、体のいろいろな部位を十分に活用するために工夫されていることに気づかされます。

ります。かつぎ運搬は、荷物を棒に吊り下げたり、刺したりして肩に担ぐ運び方です。かつては日常のさまざまな場面で見られました。水や肥やしを入れた桶をカタネボウで担いだ経験をお持ちの高齢の方もいるでしょう。籠に入れた野菜や魚を天秤棒で売り歩く行商の姿もかつてはよく見られた光景でした。博物館へ行けば実際に使われた道具を見ることが出来ます。

頭上運搬は、現在ほとんど行われていませんが、古い絵巻物などには数多く描かれています。展示の中では、頭上運搬には触れることはできませんでしたが、運搬方法の変遷を絵巻物から分析した研究によれば、平安末期には女性の頭上運搬が顕著に見られるといえます(萬納寺徳子「絵巻物よりみた運搬法の変遷」一九七二年(木下忠編)「背負う? 担ぐ? 背べる?」一九八九年収録)。薪を頭に載せて運ぶ京都の大原女の姿を思い浮かべる人もいます。

背負い運搬は、現代でも身近な運搬方法です。背負い運搬は重量物やかさの大きい荷物の運搬に真価を発揮し、ヤセウマや荷縄などの運搬具を使えば、大量の稲や枝を背負って運ぶことができます。現在の社会で、こうした多様な運搬方法を見ることはあまりありません。

もとより運搬方法は地域や時代によって差異があり、変化していくものでもあります。ただ、かつて日々のくらしに不可欠だった、モノを運ぶ道具と技術は、現代の広く普及したインフラ設備やサービスの中で見えなくなっています。例えば、水や燃料を運ぶ仕事は、現代では水道やガスなどのインフラの敷設やエネルギーにかかわる流通といった、社会的なシステムとして存在しています。先人たちが実践しながら工夫し、伝えてきたさまざまな運搬具とそれを使う体の動きを、必要としなくなっています。



水カギなどの道具の展示風景

動かし方が、少し前の時代まであったことを再発見することにあります。展示で紹介したような、普通の人々が日常のくらしの中で熟達させた運ぶ技術は、現代の私たちにとって驚きです。つまり、その驚きは、「体で運ぶ」という当たり前のように思える行為が、歴史的文化的に形成されたものであり、多様性を持つものであることにも気づかせてくれます。



写真パネルの展示風景

(もり ゆきひと 学芸員)

歴史さんぽ 万代島 新潟市中央区万代島

万代島という町名は、昭和43(1968)年の住居表示施行に伴い付けられた町名です。信濃川右岸の半島状の場所ですが、その名に「島」とつく通り、もともとは信濃川の中州でした。その中州が姿を現すのは幕末から明治時代の初め頃と考えられます。当館に残されている明治9(1876)年の絵図に、信濃川の中州として「万代島」と記された島が描かれています。

明治期の信濃川流末改修工事で、萬代橋の上流部から設置された水制工が万代島の西岸と連なるように作られました。万代島は萬代橋から下流の信濃川の水流を左岸側に寄せ、信濃川の水流を一定にする役割を担いました。

大正期の新潟港築港計画では、将来的に万代島を掘り取り、港として使える水面を広くする拡張計画が立てられます。しかし、万代島を残し港湾用地に利用する計画に変わりました。とはいえ、昭和初期まで万代島は葦の生い茂る中州であり、現在のような形になったのは戦時中の事です。石炭荷役施設増強のため、埋め立てて埠頭が造られ整備が行われたからでした。

昭和26(1951)年には新潟駅の貨物取扱が廃止され、貨物駅として万代駅が開業しました。しかし、昭和39(1964)年の新潟地震で、万代島内の施設は壊滅的な被害を受け、万代駅は廃止されました。その後、港内に点在していた石油基地が万代島先端部に集



メディアシップ20階より万代島を臨む

約され、昭和40年代には石油タンクと倉庫が立ち並ぶ場所となりました。

新潟港の機能拡大のため、昭和44(1969)年に新潟東港が開港しました。これまでの新潟港は新潟西港となり、その機能を再検討され西港再開発計画が策定されました。この計画によって佐渡汽船乗り場が移転することになりました。市街地である下大川前の乗り場では、大型化するカーフェリーに対応した設備拡大が望めなかったためです。万代島先端にあった石油関連施設は、撤去され東港に移転しました。万代島フェリーターミナルは昭和56(1981)年に完成し、佐渡への玄関口は左岸側から右岸側へ移りました。

平成15(2003)年春、万代島再開発により朱鷺メッセが開業しました。また、平成27(2015)年には万代島テラスが完成し、万代島は人々の集う、緑あふれるウォーターフロントに変わりました。万代島の歩みは、まもなく開港150周年を迎える新潟港の紆余曲折の跡でもあります。

藍野 かおり(あいの かおり 学芸員)

おすすめの1冊

花押を読む

博物館で展示されている資料の二つに古文書があります。古文書には美術資料のような華やかさはありませんが、当時の人々の生の声を詳細に聞くことができる資料です。古文書は楷書で書かれているものが少なく、とつつきにくい面もありますが、字が読めなくても、例えば折り返しなど見た目で楽しむ方法もあります。その二つに花押の楽しみがあります。

本書は、旧新潟市出身で日本中世史の大家である佐藤進一氏の著作です。花押の歴史やその体系を紹介する本で、例えば花押が名前や吉字から構成されていることや、その時々の流行があることなどを紹介しています。また、戦国時代にはライバルの花押を真似している事例があるなど、花押を見るだけでも使用者の考えや当時の人間関係を伺うことができることを指摘しています。

本書は古文書鑑賞の新たな魅力を発見する手掛かりになるでしょう。

(田嶋 悠佑 学芸員)



佐藤進一 著
平凡社
2000年10月

■歴史文化の創造

歴史は読んだり、教えられたり、知ったり、覚えたりするもので、創造するものではないと考えている人が多いようです。それは違います。誰もが問題に直面したとき、事象を歴史的に検討し、解決しようとしています。歴史とはこうした歴史意識を持つて歴史事実を紡ぎ、編み織つて創造する価値観であり、文化です。地域住民が地域の主体性や基盤、課題を歴史的な事実に基づいて考察し、認識したことへ意識的な対応をして、新たな地域文化を創造します。歴史による地域文化の創造が、地域統合を深化させ、他地域との交流を広め、地域を活性化するので、既存の歴史認識を文化活動の基盤とするだけでは、歴史文化を消費してしまい、時代が求める課題に適合できません。

■歴史文化創造・振興の担い手

地域の歴史文化の創造・振興に地域の歴史研究者は重要です。資料を調査・読解する能力を持ち、歴史事実と歴史意識に基づいて歴史を創造し、歴史叙述によってその歴史認識・歴史像を発信します。

研究者の創造した歴史像・歴史認識を理解し、住民の歴史認識を深化・革新させる地域の歴史文化人や社会教育機関・報道機関従事者が必要です。地域の

歴史の資料や叙述を学習・理解し、住民がそれを知る機会を提供したり、広報したりする役割を負います。

さらに主体的に歴史像・歴史認識の創造に参加する住民・文化人の広がりがあります。歴史研究者や歴史文化人と連携・協力して資料調査や研究に参加する、あるいは歴史意識を持つて文化創造や文化活動、社会活動を企画・実行し、創造された歴史を活用・広める、そういう人々です。

そして、行政は歴史文化の創造・振興を担う歴史文化人や社会文化活動家を住民を支援し地域の活性化を図るとともに、歴史文化に基づく文化活動を支援し全国的・世界的交流と地域活性化を実現するのです。

■新潟市の歴史文化創造

新潟市における歴史文化の現状には多くの課題があります。市の「未来ビジョン」には、既存の歴史イメージを資源として消費することは記されていますが、新たな歴史創造の施策はありません。『新潟市史』・『新潟歴史双書』などの編さん・刊行は歴史創造に意義がありました。引き継ぎ発展させるビジョンはありません。資料を保存・公開する文書館の設立は記載されていません。みなとびあの役割も示されていません。

仙台市郡山遺跡と山中樵

やまなかきり

前々号以来、淳足柵について検討を続けていますが、仙台市郡山遺跡付近に設置された「丹取郡」や「名取郡」の名称が重要と考えられています。そこで、この夏、長島榮著『郡山遺跡―飛鳥時代の陸奥国府跡―』(同成社、二〇〇九年)を読みました。そして、深い「因縁」を覚えました。

長島氏は、この本の冒頭で、一九五五年に初めて仙台市の郡山遺跡出土物に学術的検討を加え、遺物から宮殿跡・役所跡を想定し、名取郡家の可能性を指摘したのは、宮城県立図書館司書の山中樵だと述べています。そして、山中は一九二〇年に請われて新潟県立図書館設立に関わり、初代図書館長となり、その後新潟市立沼垂図書館長になったと述べ、「郡山」を見逃さなかった目が、新潟の地でも残されていないものだろうか」と記しています。私はハッと胸を突かれる思いがしました。

二〇二二年二月、当館の博物館講座で岩野邦康学芸員は「博物館と民俗学」と題した講義をします。岩野は、その中で一九三〇年代に活況を呈した新潟市域の地

域研究の基盤となり、活動を担った組織・ネットワークや人物を取り上げていますが、人物として小林存・斎藤秀平・松谷時太郎・藤田福太郎らとともに、山中を取り上げています。山中が図書館資料を収集・保存・公開する県立図書館の設立に関与したことや、一九二三年に新潟市社会課長となり、市役所内で郷土資料の収集を重視し、新潟市史編纂を推進したことに注目しています。

その後、山中は私立新潟夜間中学校初代校長や新潟聾口話学校初代校長にも就任し、一九二七年に台湾総督府図書館長に転出します。

長島氏がいう「郡山」を見逃さなかった目は、知識人・文化人のネットワークを作り、資料の調査研究を進め、後継者を育て、新潟の歴史研究、歴史叙述の道を開いていたのです。



山中樵
『新潟県立図書館創立100周年記念誌』(2016年)より転載

館長日記

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

収蔵資料紹介

森山一虎「日満航路―月山丸」(昭和十六年)

幅二メートル六十センチを超える百号の油彩画です。大型船舶の船首に「月山丸」とあり、画面右下の署名「Moriyama, 2601」のあとには「新潟港中央埠頭に於て」と記されています。戦前「新潟北鮮線」に就航した貨客船「月山丸」を、皇紀二六〇二(すなわち昭和十六(一九四一)年)に描いた絵であることがわかります。

ただ、この資料には不可解な点があります。月山丸の船名や新潟港の場所を示す記述は、実はあとから加筆されたものだという事です。

満州事変以後、移民団や義勇団の渡航に対応するため、昭和十三(一九三八年)に新造、新潟に投入されたのが月山丸でした。十六年四月ごろ、新潟連隊区の許可を得て、画家の森山一虎(一九〇二―一九六六)が現場で取材・構想したのが本作です。七月、作品は「第二回聖戦美術展」(東京)に入選しました。

森山は、大正期の新潟に自由画の種をまいた国画家の草分けでした。本作の題名はもと「出発の朝」で、埠頭の暗がりや外洋の穏やかさの対比で海に向こうへの期待を表そうとしたようです。しかし彼が画家を志して接近した当時の中央美術界では、題材の道徳的意味と記録性が重視されました。森山は従軍画家らと交わりながら、時局にか



なった絵画の作法を助言され、場の特定を避けたとも考えられます。あるいは月山丸への惜別の思いだった、あるいはロマンチックすぎるでしょうか。作品発表の半年後、月山丸などの上等な客船は、触雷を避けて敦賀に集約されたのです。新潟を去ったその雄姿の称号を、画家が残したくなったのかもかもしれません。

ささやかな謎を残す月山丸の絵。現在東京の「ドック」に入り、修復家の手で長年の傷をいやしています。

(木村 一貫 学芸員)

認識に基礎を置く文化・社会活動への協力など、館が果たすべき役割は多く、成果は十分ではありませんが、地道に行ってきた。

今、取り組みが遅れているのが、歴史研究への資料の積極的公開提供です。歴史文化の担い手へ資料を提供することは重要です。資料収集・整理・調査・保存活動を踏まえた所蔵資料の公開、資料の所在情報の提供、資料の歴史的価値に関する情報の提供などを進める必要があります。研究者や歴史文化人、社会教育・学校教育に携わる人、報道機関、社会・文化活動を行う人、そして地域住民など多くの人びとが、歴史文化を創造し、振興し、活用して、地域の歴史意識を高めるには、資料の公開は不可欠です。

現在、資料目録や資料データ、資料映像などの公開は進んでいません。次々に収集される資料の基礎調査、保存などに忙殺されています。企画展示や教育普及系の事業に追われています。経費削減と歳入を増やす試みに労力を割かれていきます。それでも長期的に新潟市が歴史文化を創造し、振興して、市民が新潟市を大切に思い、他地域や世界と交流を進めるためには、私たちは資料公開に尽力しなければなりません。私たちの課題です。

(いとう すけゆき 副館長)